



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	楚ト笹祭禱簡における宗教儀礼と鬼神信仰に関する研究
Author(s)	趙, 珊
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16970号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16970
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99814
Type	doctoral thesis
File Information	Shan_Zhao_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 趙 珊

学位論文題名

楚卜筮祭禱簡における宗教儀禮と鬼神信仰に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、戦国期楚国において展開した卜筮・祭禱実践を、出土竹簡・傳世文獻・考古資料を総合的に用いて分析し、楚人が想定した鬼神世界の構造と、そこにおける宗教儀禮の運用實態を明らかにすることにある。具体的には、まず、卜筮祭禱簡を「隨葬文書」として改めてその性格と機能および楚人の死生観・祖先観の中での位置づけを明確にする。次に、包山卜筮祭禱簡に特徴的に見られる「凶攻解」および「攻尹之攻執事人」の性格を再検討し、楚地における特殊な祭禱儀禮の一類型を明らかにする。さらに、包山・望山・天星觀・秦家嘴・新蔡葛陵など各墓葬における卜筮祭禱簡を横断的に比較し、命辭構造・祭禱対象・凶攻解対象などに見られる異同を通じて、楚人の鬼神信仰と宗教儀禮の多様性と共通性を明らかにする。また、卜筮祭禱簡に現れる祖先神・自然神・土地神・厲鬼などの諸範疇を再整理し、それぞれの實體を再検討する。最後に、卜筮祭禱簡に見られる祭禱方式を、傳世本および竹簡本『金縢』に描かれた儀禮実践と対照し、両者の比較検討から、従来十分に説明されてこなかった歴史的問題に對して新たな解釋可能性を提示する。

・本論文の内容

序章では、本研究の対象となる卜筮祭禱簡をめぐる研究背景を整理し、戦国期楚国における宗教実践と鬼神信仰に関して、解決を試みる課題と研究目的を明確にする。あわせて、使用する主な文獻資料と分析の手順を示し、全體を貫く基本的な研究方法を提示する。

第一章では、包山・望山・天星觀等に出土する卜筮祭禱簡を、埋葬時に墓室へ納められた隨葬文書として捉え直し、その性格を検討した。その結果、卜筮祭禱簡が隨葬されたことは偶然ではなく、先秦期における楚人の生死観・鬼神観・祖先祭祀制度が葬送実践の中で具體化した結果であることを示した。そこに記されるのは抽象的概念ではなく、墓主が疾病・凶禍・運命の不確實性に直面して実際に行った占筮と祭祀の記録であり、個人の祈願と畏怖、そして楚人が鬼神秩序を理解し人鬼關係を維持しようとした具體的方途を映し出すものである。

第二章では、包山卜筮祭禱簡における「凶攻解」を再検討の対象とした。従来、多くの研究者は、『周禮』に見える「六祈」の一つとして「攻」を捉え、「凶攻解」を鬼神に對する強硬な除崇手段と理解してきた。しかし、『楚地出土戦国簡冊（十四種）』において既に指摘されるように、「攻」は「攻執事人」と密接に関連する可能性が高い。これを踏まえつつ、「凶攻解」の語彙および用例の分析を行い、「凶攻解」を「攻をして解せしむ」と読みうることを、すなわち「攻」（巫祝と類似する職能者）が鬼神との交渉を通じて占筮依頼者の憂患を他所へ轉移させる一種の移崇法であり、しかもそれが豫備案として位置づけられていることを導き出した。この解釋は、楚地の祭祀儀禮における災厄對處が除崇案だけではなく、祟りを根本的には除去しえないものと捉えつつ、まず祖先神らの加護を祈願し、それでも不足と占斷される場合に「凶攻解」によって祟りの轉移を圖るという、多段的かつ柔軟な方策を備えていたことを示すものである。

第三章では、天星觀卜筮祭禱簡における鬼神信仰を、祭祀対象の再分類と事例分析を通じて検討した。その結果、天星觀簡に見える祭祀対象は、祖先・神祇・厲鬼の三類に區分するのが妥当であり、とりわけ祖先神「惠公」と自然神「大水」が多様な祭法と高格の犠牲をもって集中的に祀られる守護的存在として位置づけられ、神祇は土地神・自然神・その他の神祇に整理しうるが、「その他」に屬する神々の性格の確定が困難なものも多く、楚人の鬼神世界の地域性と多様性を示す層として

注目される。あわせて、包山ト筮祭禱簡と整合する一般的な順序が確認できる一方で、祖先神が他の神祇に先立って祀られる例など、占問の性格や儀禮目的に應じて順序・組み合わせが柔軟に運用されていた可能性が示唆され、天星觀ト筮祭禱簡は、楚における祭祀構造と鬼神觀を具體的に把握するうえで重要な史料であり、その分類枠組みは包山・望山等との比較研究にとって有効な参照軸となる。

第四章では、楚國におけるト筮祭禱簡の比較を通じて、望山と包山の祭祀體系の共通点と相違点を検討した。包山ト筮祭禱簡は保存状態が良好で體例も整っていることから、従来は楚のト筮祭禱簡を論じる際の事実上の基準とみなされてきたが、望山ト筮祭禱簡の分析から、包山の體例のみでは楚國の祭祀文化の多様性を十分に捉えきれないことが明らかになった。望山簡と包山簡の差異としては、ト筮祭禱簡における「北方」「南方」の扱いを検討したうえで、齋戒の記録が望山簡には多く見られる一方、包山簡には見られない点に着目した。この違いは、齋戒が自明の前提として省略された可能性や、記録者の書寫習慣の差異による可能性が考えられる。また、「凶攻解」案をめぐる、望山簡において祭禱対象と凶攻解対象が同時に記録される異例の例を取り上げ、包山簡との比較を通じて新たな理解の餘地があることなどを示した。

第五章では、新蔡葛陵楚墓から出土したト筮祭禱記録と遣策を手がかりに、楚の先祖である楚先・三楚先、荊王および平夜君成の祖先體系などに關する記述を總合的に分析する。「我先」「楚先」「三楚先」「荊王」「五世」「三世之殤」「上下内外鬼神」といった表現の検討を通じて、楚王室および封君層の祖先觀と神靈階層の構造を明らかにし、ト筮祭禱簡において祖先がどのように祀られ、いかなる宗族秩序の枠内に位置づけられていたかを論じる。

第六章では、ト筮祭禱簡との比較を通じて、清華簡『金縢』における祭祀儀禮の諸問題を検討した。「穆卜」は身代わりによる解決策を採用すべきか否かを問う占問であり、その實踐内容はト筮祭禱簡に見える「凶攻解」と對應する一方、「穆卜」が事前の占問、「凶攻解」が吉兆を得たのち專職の（攻）執事人によって行われる移崇儀禮という區別があることを示した。『金縢』では、本来は攻執事人が擔うべき役割を周公自身が引き受け、災厄を自らに移して武王の回復を祈るという、通常の祭禱よりも一段と踏み込んだ行爲が描かれており、その秘匿性は禮的規範からの逸脱性と政治的配慮の雙方に由来する可能性が高いことを論じる。また、包山二三一簡「凶攻祝歸佩紱・冠帶於南方」をめぐる、清華簡『金縢』の句と對照して讀むことにより、従来難解とされてきた記述を、南方に特設した壇に佩飾を獻じる儀禮として再解釋しうることを示した。

結論として、ト筮祭禱簡は楚人の鬼神觀念と祖先祭祀制度を具體的かつ動的な形で映し出す一次史料であり、そこに記されたト筮・祭禱行爲は、疾病・凶禍・政務・運命の不確實性に直面する個人が、鬼神との關係を調整し、自らの生を再編成しようとする試みであった、と言える。他方で、分析対象がいずれも貴族の墓葬に限られ、楚社會全體の宗教實踐を代表するものではなく、また、一部鬼神の性格や宗教儀禮の本質については、なお不明な点が少ないことも確認された。

付録では、包山ト筮祭禱簡の釋文・訓讀・日本語譯を一括して収録し、原文資料を隨時参照し得るよう配慮する。